7．8 栖光庵の尺八

「八幡の語り草」第 38 話（27 頁）

知多市八幡字観音脇 25 番地に所在する、海嶋山 栖光院（本尊 聖観世音菩薩 曹洞宗）の境内には、知多市指定保存樹第1号の樹齢約 740 年の大きな楠の木があり、知多新四国 80 番の札所となっている。

栖光院は、元亀元年（1570）以前の開創で、もとは真言宗に属し、海嶋山　　慈眼寺といい、栖光庵・慈林坊を末寺とする一山であった。天正五年（1577）栖光庵一寺に合併され、曹洞宗に改められた。昭和十七年に現在の栖光院と改称した。

この栖光院の寺宝の一つに尺八がある。今から約 210 年ほど昔に遡る話が現在に伝えられている。寺に石城という和尚がいて、仏道ばかりでなく、芸道にも秀でていたが、なかでも尺八の素晴らしい名手としても知られていた。

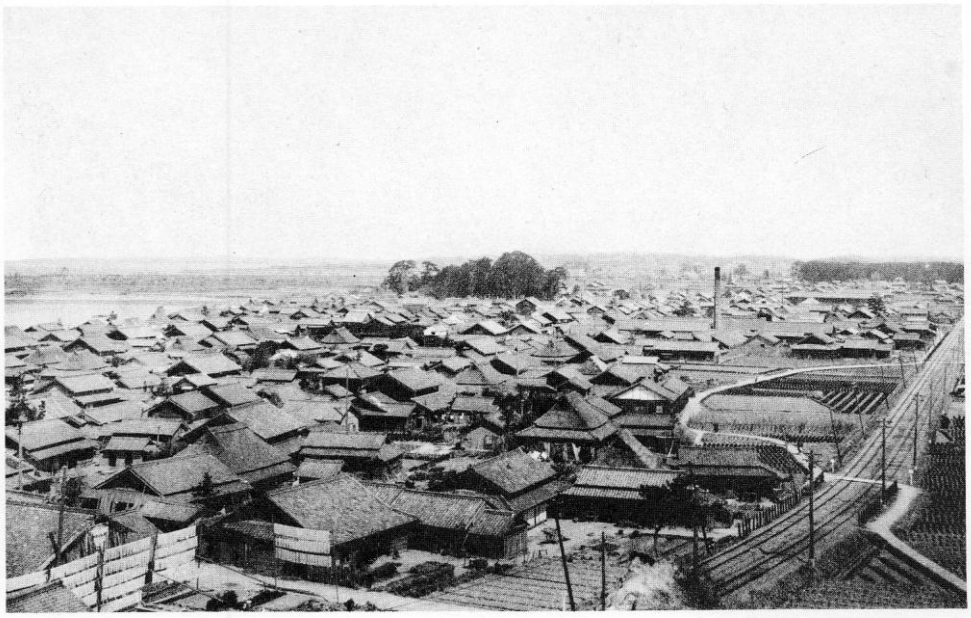
ある日、一人の虚無僧が「石城和尚の噂を耳にし、尋ねてきました。尺八のお手合わせをお願いしたい」と申し出た。

まず、虚無僧が笛を唇にあて、目を閉じて吹き始めた。その音色は、重くどっしりとして立派なものであった。荘重という言葉がぴったりする音色、節廻しであった。吹き終わった僧の表情は満ち足りた様子であった。

石城和尚は、何も言わず僧を見つめていた。やがて自分の尺八を取り出し、大きく息をした後、静かに吹き始めた。人の心を揺さぶるようなその音色は、嫋々として流れた。寺の庭には、いつしか夕闇の気配が流れ始めていた。

吹き終わった石城和尚の前には、虚無僧の姿は消えていた。僧の座っていたあたりに、僧が吹いていた尺八だけがひっそりと置かれていた。

（参考「知多市誌本文編 P805 ）



栖光庵裏山より町を望む（大正 11 年頃）